

民間主導・官民連携による前橋のまちづくり

民間の自発的な活動に、行政が制度や仕組みで応えようとする歩みが始まっています。

こうした連携の芽が、前橋の持続可能なまちづくりを支えつつあります。

歴史から「めぶく。」へ 前橋、再生の物語

かつて前橋市は、全国でも有数の生糸の集積地として、製糸業を中心に大きな繁栄を遂げました。利根川の豊かな水資源と、交通の要衝としての地の利を生かし、養蚕・製糸・商取引が活況を呈していた当時の前橋には、経済の勢いと市民の誇りが満ちていたといえます。

しかし時代の変化とともに、生糸産業は衰退の道をたどり、街のにぎわいも徐々に失われていきました。さらに、新幹線の開通により交通軸が変わり、新幹線駅が隣の高崎市に設置されたことで、人と経済の流れは高崎へと大きく傾いていきました。中心市街地からは活気が失われ、かつて賑わいを見せていた商店街にはシャッターを閉めた店が連なりました。周辺の高校も郊外へと移転し、学生の姿も街から消えていきました。夕方の市街地を子どもや女性が「怖い」と避けるようになり、人通りのなくなった街には沈んだ空気が漂うようになりました。

土地の価値を示す路線価は、2012年、2013年と連続して47都道府県の県庁所在地の中で最下位にまで落ち込みました。かつて「糸のまち」と呼ばれた栄光は、もはや過去のものとなり、市民の間では「前橋には何もない」「高崎はいいよな」といった言葉が交わされるようになりました。街には、あきらめにも似た空気が広がっていたのです。

そのような状況の中、2016年に前橋市は新たなビジョンを掲げました。

その名は、「めぶく。」

これは、単なる経済再生でもハード整備でもありません。人が芽吹き、想いが芽吹き、未来が芽吹く、市民一人ひとりの可能性と内発的な力に光を当てる、小さくても確かな希望の芽を育てていこうという試みでした。

「めぶく。」を合言葉に、街の動きは徐々に変化を見せ始めました。民間と行政、市内と市外、世代や立場を越えて人々が交わるプロジェクトが次々と生まれ、前橋は再び“まちの物語”を語れる場所へと変わりつつあります。

「何もないまち」から、「何かが始まるまち」へ。

前橋の再生は、過去の栄光を取り戻すことではなく、まったく新しい価値を創造する挑戦であり、衰退のただなかでこそ芽吹いた、しなやかな都市の再構築であると考えています。

前橋モデルの形成過程

民主導・官民連携によるまちづくり実践年表

2011

・「EOYモナコ世界大会」出場

・「群馬イノベーションアワード」開始



2016

・官民共創による「前橋ビジョン」発表会

・「太陽の会」発足

・「前橋まちなかエージェンシー」設立



2013

2014

・「群馬イノベーションスクール」開始

2020

・廃業した創業300年の「白井屋ホテル」を開業



2019

・ポートランドから学び「前橋アーバンデザイン」策定

・前橋商工会議所「グリーン&リラックス」策定

・民間による「前橋デザインコミッション」設立



2017

・官民共創によるポートランド視察

2021

・「JINS PARK」開業

・「前橋新聞MEBUKU」創刊



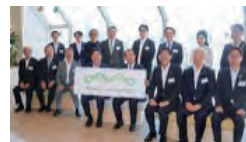
2022

・官民共創により「めぶくグラウンド株式会社」設立

・デジタルによるまちづくりを推進する
官民による「デジタル田園都市国家構想TYPE2・3」採択

・地域通貨「めぶくPay」スタート

・「前橋BOOK FES」開催



・民間資金により「馬場川通り」が再整備

・「ヒストリア前橋」開業

2024

フィランソロピーへの目覚め

世界の起業家のロールモデルに刺激を受ける



【テーマ】

群馬イノベーションアワード — 起業家が次々に生まれる土壌へ —

【コンセプト】

「出る杭、求む」

かつて「出る杭は打たれる」と言われた日本社会。しかし今、私たちはその価値観を更新する時代にいます。むしろ“出る杭”こそが、社会を打ち破り、未来を切り拓いていく。私たちはそう信じています。群馬イノベーションアワードは、地方に眠る原石のような挑戦者を見出し、起業家が次々と生まれる土壌をつくるためのプログラムです。「挑戦する人」を称え、その先の実現を後押しすることで、地域から新たな価値を生み出すことを目指しています。群馬イノベーションアワードは、単なる表彰にとどまらず、入賞者には本気の挑戦を後押しする特典を多数用意しています。たとえば、入賞者にはシリコンバレーや欧州など、スタートアップ拠点を巡る海外研修ツアーを通じて、世界水準の視点を体感してもらいます。高校生部門においては、慶應義塾大学SFC（湘南藤沢キャンパス）へのAO入試出願資格が付与されるほか、前橋国際大学では授業料の免除制度も設け、若い才能が次のステージへ進む道を実際に切り拓いています。こうした実績と信頼が広がり、現在では高校生部門だけで約500組の応募が集まる規模へと成長しました。群馬という地方都市から、未来をつくる若者たちが羽ばたこうとしています。私たちが目指すのは、「起業家が生まれ続ける土壌」を地域に根づかせることです。出る杭、求む。そして、その杭を打つのではなく、支える社会を、群馬から。

【組織】

上毛新聞 × 田中仁財団

常識にとらわれず挑戦する“異端”こそ、未来を拓く力。
そんな出る杭を、群馬は全力で応援します。

【具体例】



①アワードの様子



②シリコンバレーツアー



③群馬イノベーション会議

【テーマ】

群馬イノベーションスクール — 地域にビジネスの学び場を —

【コンセプト】

地方に、挑戦の第一歩を。

地方には、ビジネスを本格的に学ぶ環境が少なく、挑戦したくても「どう始めていいかわからない」という声が数多くあります。そんな“最初の一步”を支えるために生まれたのが、「群馬イノベーションスクール」です。田中仁財団の支援により、毎年約30名が無料で受講できるこのスクールでは、一流大学のビジネススクールの教授が毎月前橋に足を運び、最先端の実践的な講義を行っています。教室には年齢も職業も異なる受講生たちが集い、まるで現代の寺子屋のような濃密な学びの場が形成されています。ここで学ぶのは、知識だけではありません。自ら問いを立て、仮説を検証し、仲間と議論しながら社会に働きかけていく力。ビジネスの立ち上げ方から、プレゼン、マーケティング、社会課題との向き合い方まで、リアルな起業の現場に即したプログラムが用意されています。このスクールで学んだ受講生たちは、「群馬イノベーションアワード」に挑戦し自らのアイデアを発表しています。そんな環境から起業家や政治家として地域や社会を動かす人材が次々と生まれています。「学び」から「実践」へ、そして「変革」へ。この循環を、地方から生み出す。それが、群馬イノベーションスクールの使命です。

【具体例】



①イノベーションスクール



②スクール生同士の交流



③スクール生の真剣な学び

【組織】

田中仁財団

学ぶ機会の少ない地域だからこそ、本気で学べる場を。
現代の寺子屋から、起業家が育つ。

【テーマ】

前橋ビジョン「めぶく。」 — 官民連携で描いた都市の理念 —

【組織】

前橋市役所、田中仁財団

【コンセプト】

「めぶく。」— Where good things grow (良いものが育つまち)

人口減少、若者の流出、中心市街地の空洞化、地域経済の衰退。地方都市・前橋が直面する課題に対し、行政と民間が垣根を越えたプロジェクトでした。目指したのは、計画ではなく「行動を生むビジョン」です。このまちに本当に必要なのは、補助金でもなく、箱モノでもなく、「自分たちの手で未来を描こうとする意志」でした。プロジェクトには、ドイツ・ミュンヘンのブランディング会社 KMS が参画。彼らが提案したコンセプトは“Where good things grow”（よいものが育つ場所）。この言葉を、糸井重里さんが「めぶく。」と訳し、前橋ビジョンの中心に据えました。「何もない場所」ではなく、「未来が育つ場所」として、自らの土地を信じる視点が生まれたのです。

市民との対話を重ねる共創型のプロセスを経て、「めぶく。」はスローガンにとどまらず、実際のプロジェクトへと展開。

白井屋ホテルの再生、スタートアップ支援、教育・デジタル改革など、都市全体で実装が進んでいます。いま、「めぶく。」は前橋のアイデンティティであり、希望の循環を生む都市の共通言語となっています。未完成だからこそ、よいものが育つ。前橋は、そんな都市を目指しています。

【具体例】



①前橋ビジョン発表会の様子



②前橋ビジョン発表会の様子



③前橋ビジョン発表会の様子

【テーマ】

前橋の民間によるまちづくりへの挑戦 一般社団法人太陽の会

【組織】

【コンセプト】

「めぶく。」良いものが育つまちへ

前橋市の未来を見据え、民間の力で地域の価値を創造し、持続可能なまちづくりを推進します。

前橋の未来を切り拓くために、太陽の会は「見返りを求めない民間資金」の力を原動力とし、持続可能なまちづくりに挑戦しています。地域に本拠を置く企業や個人が、自らの利益を地域へと還元し、行政任せではない“民間発”の価値創造を進めています。

2024年度には一般社団法人化に伴い、会費制度を一律年間50万円に見直しました。これにより、従来の「純利益の1%または最低100万円」という参加条件から門戸を広げ、より多くの仲間が集える仕組みへと進化。設立当初の23社から、現在では65名の会員が参加するネットワークへと拡大しました。

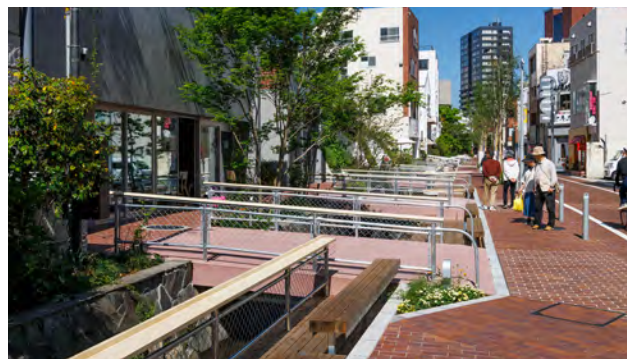
太陽の会は、単発的な寄付や支援にとどまらず、継続的な地域の価値向上を目指す取り組みです。企業家たちの思いや資金を“共益”のために活かし、まち全体の魅力と活力を高めていきます。共に考え、動き、支え合う。そんな新しい前橋のかたちが、太陽の会の活動から生まれつつあります。

【具体例】



①太陽の鐘の誘致

岡本太郎氏の作品「太陽の鐘」を広瀬川河畔に設置し、地域のシンボルとして再生



②馬場川通り遊歩道の整備

約3億円を投じて、中心市街地の遊歩道を整備し、地域の景観向上に貢献



③若者起業への支援

クラフトビール醸造所を開業する20代若者に1,500万円の資金提供

【 組織 】

太陽の会 グランドデザイン部会

グランドデザイン部会は、
「デザイン都市まえばし」の実現に向けて、
MDCと密に連携しながら、
前橋アーバンデザインの社会実装を
推進する部会です。

前橋のビジョンを可視化し市民と共有するため、MDCと連携しグランドデザインに基づく具体プロジェクトを当部会で企画・推進。官民連携での社会実装を通じて、太陽の会ならではの独自性を活かし、前橋を日本を代表するデザイン都市へと昇華させ、その再興事例を国内外に発信します。



【 組織 】

太陽の会 コミュニティデザイン部会

コミュニティデザイン部会は、
中心市街地の価値向上を目指し、
地域内外の多様な主体と連携して、
新たな出合いやにぎわいを創出する
イベントを支援する部会です。

主に中心市街地（25ha）を対象に、日常的な賑わいを創出する事業
に対して、さらなる価値向上を目的として拠出を行います。資金提供
をするだけでなく会員自らが地域住民や行政と一緒にあって新しい
価値を生み出すべく企業人自ら主体的に活動を行っています。

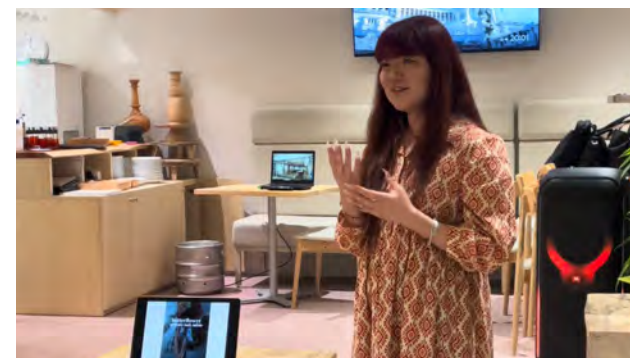


【 組織 】

太陽の会 開業支援部会

**開業支援部会は、
若者や挑戦者の開業を支援し、
市役所と連携して前橋中心市街地に
新たな価値と活気を生む持続的な
街づくりの起点をつくる部会です。**

前橋の中心市街地(25ha)のエリア内で開業する事業のうち、新たな価値を生む個性的な若者に対し、前橋市と連携しながら、重点的に資金援助していきます。これにより、上記エリアに多様で個性的なお店が集まる流れを加速させ、中心市街地の新たな価値を創造します。さらには、その様子をmebuku TV(独自YouTube)で公開し、熱量を他地域にも伝播させます。



【 組織 】

太陽の会 広報部会

広報部会は、SNSなどのメディアを通じて
前橋の変化と魅力を広く発信し、
関心と共感を呼び起こし、
街の価値向上とまちづくりの加速に
つなげる役割を持つ部会です。

太陽の会の活動や前橋で起きている変化を広く発信し、関係人口を増やすために、独自youtubeチャンネル等を企画配信しています。開拓者たちの圧倒的な熱量とその伝播、人々が芽吹いていく様子、その裏にある苦悩やヒューマンドラマを描き出し、街づくりの過程やストーリーを多くの方に知ってもらいます。そして、日本中・世界中の他の地域にも勇気と刺激を与えるようなオンリーワンの地方 SNS メディアを目指します。



【テーマ】

街づくりの「やりたい」を裏で支える

【組織】

一般社団法人 前橋まちなかエージェンシー

(略称：MMA)

【コンセプト】

「ローカルライフデザイン」：地方暮らしを再構築する

2016年、前橋ビジョンに共感した3名により設立。まちづくりの“裏方”を担う存在として、地域に根ざした自走型の活動を展開しています。多くの人が「こうしたらいい」というアイデアや提案を持っている一方で、それを実行・支える裏方の担い手がないという課題がありました。その課題を解決し、「裏方を本業にする」仕組みと組織をつくるのが設立の目的です。法人化した理由は、それまでのまちづくり活動はボランティア中心で、責任感や継続性に限界がありました。「まちづくりを本業にできる街にする」というミッションのもと、法人化。新卒採用も行い、若者が“裏方”として働く職域を創出しました。運営の特徴は、補助金に頼らない自主事業による街づくりの運営、人と人をつなぎ、巻き込む循環をつくる、若い人材がまちづくりの当事者になる次世代型モデルの育成です。事業の内容は、商店街の課題解決支援事業、街のコミュニティハブ「comm」の運営、若手クリエイティブクラスの育成「デザインスクール」の企画運営、各種プロジェクトの事務局運営・委託事業です。MMAは、まちづくりを本業とする若者を増やすことで、これからも次なる芽吹きを循環を創っていきます。

【具体例】



① イベントや街づくり事業の事務局機能



② 街づくりのコミュニティハブ施設「comm」の運営



③ クリエイティブクラスを育成するデザインスクール

【テーマ】

世界に誇れるまちづくりへの挑戦

【組織】

一般社団法人前橋デザインコミッション

(略称：MDC)

【コンセプト】

100年後も廃れないアーバンデザインの具現化と継続したまちづくりのために

前橋デザインコミッション（MDC）は、前橋市が策定した「アーバンデザイン」を実現するために生まれた、官民共創のまちづくり組織です。美しいビジョンを“絵に描いた餅”で終わらせず、実際の空間や暮らしの中で具体化していくために、行政のアイデアだけでなく、民間の視点や実行力を取り入れながら活動を続けています。

その中核的な役割を担うべく、MDCは前橋市から都市再生推進法人に指定され、前橋市中心市街地のアーバンデザイン対象区域（約158ヘクタール）を中心に、市と連携しながら都市空間の再編や価値創出を進めています。さらに、前橋のまちづくりを一過性のもので終わらせず、首長が代わっても継続できる民間主導の仕組みとして確立するため、運営財源を会員からの会費で賄っています。現在の会員数は164名になります。

都市の未来を、行政任せでも、民間だけでもなく、ともに描き、ともに動かす。それが、MDCの掲げるまちづくりのかたちです。

【具体例】



①前橋市アーバンデザインの推進

まちづくり指針の共有・浸透



②馬場川通りアーバンデザインプロジェクト

アーバンデザインのモデル的可視化を通じた公共空間の民間整備と住民自治的管理の実現



③まちづくりプレーヤーの育成

「NEXT MACHI CREATORS」等の担い手育成プログラム、社会実験等の実施

【テーマ】

白井屋ホテル

前橋の“めぶく”を体現する、世界に開かれたアート建築ホテル

【コンセプト】

前橋のリビングー市内の人と市外の人が自然に交わる場所。

白井屋ホテルは、廃業した創業300年の老舗旅館を再生し、2020年に生まれ変わった前橋の新たな象徴です。このホテルは、単なる宿泊施設ではありません。まちの文化、歴史、人の流れを結び直し、前橋の「リビング（居間）」のような場所として設計されました。設計は、建築家・藤本壮介氏。この空間は、宿泊者だけでなく、まちの人々にも開かれています。アートを見に訪れる観光客、ラウンジカフェで仕事をするクリエイター。“市内の人と市外の人が自然に交わる「前橋の交差点」”が、ここにあります。外壁にはローレンス・ウィナー、館内には杉本博司、リアム・ギリック、ライアン・ガンダーなど、国内外の現代アートの巨匠たちの作品が常設されています。「泊まる」ことそのものが文化体験となり、まちと世界をつなぐ装置として機能しています。白井屋ホテルの復活は、単独のプロジェクトではありません。それは、前橋ビジョン「めぶく。」の実装フェーズを象徴する最初の一步でした。衰退していた商店街に新たな磁力が生まれ、周辺には若手経営者や飲食店が次々と集まり始めています。このホテルが目指しているのは、単なる観光資源ではなく、「まちの日常に根ざした非日常」。前橋に暮らす人にとっても、訪れる人にとっても、「ここに来ると、前橋っていい街だな」と自然に感じられるような場所を目指しました。白井屋ホテルは、建築・アート・地域経済が融合した“めぶく”の象徴です。地方都市にも、世界と接続する場所はつくれる。そして再生は、誰かが「信じる」ところから始まる。ここは、前橋の未来の交差点。前橋の「リビング」から、新しい出会いと価値が、今日も芽吹いています。

【具体例】



【テーマ】

前橋発、新しい風を伝えることで シビックプライドを醸成する

【コンセプト】

「めぶく。」前橋の魅力を発信する地域メディア

前橋新聞「mebuku」は、2021年7月19日に誕生しました。「前橋が好きです。でも活気がない」そんな声をたびたび耳にする中で、私たちは気づきました。いま前橋では、実はさまざまなおもしろいことが起き始めている。「めぶく。」という言葉が象徴するように、新しい挑戦や動きが芽を出し、育ち始めているのです。前橋をもっとワクワクさせたい。前橋の魅力をもっと知ってほしい。そんな願いを込めて、私たちは「mebuku」を創刊しました。「mebuku」は、地域で芽吹く人・もの・出来事を伝えるフリーペーパー型の地域メディアです。B4版フルカラー・全16ページで、年4回・発行部数は15万部。市内の新聞購読世帯や中学・高校・大学に加え、前橋プラザ元気21、アクエル前橋、前橋文学館、アーツ前橋など主要文化拠点でも配布され、まちの空気を内外に届けています。また、東京の蔦屋書店（代官山・銀座・六本木）でも展開され、前橋の今を広く発信しています。たとえば最新号では「舞台と競技」をテーマに、ミュージシャン藤巻亮太さんや、世界陸上代表の小林香菜さんといった“前橋に縁ある挑戦者たち”を特集。毎号ごとに変わる切り口が、前橋の多様性と奥深さを浮かび上がらせています。そしてこの取り組みは、地域の企業の協賛によって支えられています。前橋を愛する企業が自発的にサポーターとなり、紙面づくりを通して、地域全体のカルチャーと活力を育む“共犯者”となっています。「mebuku」は、単なるメディアにとどまらず、前橋というまちが自らの言葉で自己紹介をするツールであり、地域を内外に発信するための「顔」です。これからも、前橋にめぶく動きを見つけ、伝え、育てていきます。



【組織】

前橋新聞MEBUKU

(株式会社ぐんま瓦版)

前橋新聞「mebuku」は、前橋市の魅力を再発見し、地域の活性化を目指すフリーペーパーです。市民や訪問者に向けて、前橋の「今」を伝える情報を提供しています。

【テーマ】

民間による公共への挑戦

(社会価値と経済価値の両立)

【組織】

JINS地域共生部

【コンセプト】

人と地域がつながる拠点 JINS PARK

JINS PARKは、人と人が自然に出会い、つながることで地域に活力をもたらす「交流の場」として誕生しました。

現代の地域社会では、人と人とのつながりが希薄になり、孤立や無関心といった課題が深刻化しています。こうした状況の中で、世代や立場を超えて誰もが気軽に立ち寄り、対話が生まれ、共に時間を過ごせる“場”の存在が、地域の再生と活性化には不可欠だと私たちは考えます。

JINS PARKは、そうした出会いや交流を通じて、地域に新たなつながりや活動の芽を生み出すプラットフォームを目指しています。地域課題に真摯に向き合い、その解決をサポートすることで、住民自身の手による自立的な活動を後押しし、活気ある街づくりに貢献していきます。

「街の元気は、私たちの元気」という信念のもと、地域社会の豊かさと私たち自身の事業の持続的な成長を両立させていきます。JINS PARKは、社会価値と経済価値を同時に創出するCSV経営(現代版 三方よし)の実践拠点です。

【具体例】



①つながるマルシェ

地域のクリエイターや商店と連携し、イベント運営ノウハウを共有。JINSがハブとなり、新たな出会いと交流を生み出します。



②キッズワークショップ

未来を担う子どもたちの可能性を育むアートやビジネス体験を提供。自由な表現力や創造力を刺激し、まちづくりへの関心を高めます。



③公募イベント

地域で活動する方々の発表の場を提供し、その想いをカタチにするサポートを通じて、地域全体の活性化を促します。

【テーマ】

ハッキングされないIDによるデジタル基盤づくりへの挑戦

【コンセプト】

一人ひとりに寄り添う個別最適サービスの提供

私たちは、人と人との信頼を基にこれまで生きてきました。しかしデジタルで繋がる社会では、信頼という基盤が根本から崩されています。私たちは、コミュニティを復活・維持させるためには、デジタルでの繋がりにおいても人と人との信頼を築けることが絶対条件であると考えました。ではどうしたらデジタルに信頼を持ち込むことができるのか？一つの鍵はマイナンバーカード活用による本人確認、そしてもう一つの鍵はスマホに実装した公開鍵暗号方式のデジタルID「めぶくID」です。

めぶくIDは、本人確認の上で、なりすましや乗っ取りができないログイン機能を実装し、更に事業者を超えたデータ連携を可能とする仕組みです。既に全国の他地域への横展開が始まっており、めぶくIDをモジュールとして銀行や交通、医療他さまざまな分野へ提供することで広がりつつあります。この基盤があることで、パーソナルデータを事業者を超えて活用（本人同意が前提なのは勿論）することで、一人ひとりに個別最適なサービスの提供を実現します。

【具体例】



①データ連携こそが鍵

前橋は「めぶくPay」を活用し、データ連携による給付金支給をいち早く実現。他地域の地域通貨で問題となっている不正利用などを防ぐ仕組みを備えています。



②地域・産業に横展開

デジタル田園都市プロジェクトで前橋市開発のシステムの相次ぐ採用と横展開。事業者連携を安全に実現できる仕組みとして全国的に評価されています。



③スタートアップ・新サービスの後押し

終活プラットフォームのベンチャーSouSouをはじめ、本人認証付き電子マネーや建設現場の安全管理システムなど、新たなサービスの創出を後押ししています。

【組織】

めぶくグラウンド株式会社

産学官金57団体による社会課題解決企業

本人同意のもと、パーソナルデータを活用し、事業連携によって一人ひとりに最適なサービスを実現
持続可能なまちづくりを推進します。

【テーマ】

【組織】

本でみんなが元気になる。前橋BOOK FES 前橋BOOKフェス実行委員会

【コンセプト】

「本」と「人」と「まち」が生み出す、
楽しさや心地よさを

「RockにフェスがあるならBookにフェスがあってもいい」という
糸井重里氏の発想を起点に、前橋市の中心市街地を舞台にした本の祭典。
「もう読まないけれど、処分するにはもったいない」本を通じて、人と人、
まちと人がつながる、お金という概念をなくした新しい形のブックフェスティバルです。

前橋BOOK FESは、「本でみんなが元気になる。」を合言葉に、前橋市の中心市街地を舞台として開催される、新しいかたちの本の祭典です。これまでに2022年、2024年と隔年で開催されており、運営資金は地元企業の協賛やクラウドファンディングによって支えられています。「Rockにフェスがあるなら、Bookにだってフェスがあっていい」そんな糸井重里さんの言葉をきっかけに始まったこのフェスは、「もう読まないけれど、手放すには惜しい」本を通じて、人と人、そしてまちがゆるやかにつながる、前橋発のユニークな取り組みです。最大の特徴は、単なる書籍販売イベントではなく、参加者が本を持ち寄り、互いに譲り合う“本のやりとり”が主役であること。初回となった2022年には26,000冊以上の本が集まり、その多くが新しい読み手のもとへと渡りました。そこには、本をきっかけとした偶然の出会いや対話が生まれ、それがこのフェスの魅力となっています。加えて、本にまつわるトークイベント、朗読、音楽、子ども向けワークショップなどもまちなか各所で開催され、街全体が「本のある風景」に染まります。さらに、まちなかにテントを張って夜を過ごす「まちなかキャンプ」では、本と共に過ごす非日常の時間を味わうことができます。本を通して、人とまちと文化がゆるやかにつながり、前橋のまちなかが一日限りの“本の都市”に生まれ変わる。前橋BOOK FESは、世代や立場を超えて人と人が出会い、学び、心を動かす、地方発の新たな文化イベントとして注目を集めています。今後も、協賛やクラウドファンディングなど多くの人の共感と支援を得ながら、「本と人とまち」が育ちあう未来を、前橋から発信していきます。

【具体例】



【テーマ】

【組織】

「四つの危機」を乗り越えた“民力”を伝える ヒストリア前橋 (運営：コシダカホールディングス)

【コンセプト】

江戸時代から現代まで、前橋の復興の歩みをたどる 歴史エンターテインメント施設

400年にわたる激動の歴史の中で、前橋は4度の大きな危機に直面しました。それでもこの街を支え続けたのは、市民の力＝「民力」です。ヒストリア前橋では、その民力の軌跡を最新のデジタル映像と展示**で体感できます。

ヒストリア前橋は、「まねきねこ」で知られるコシダカホールディングスが設立・運営する、歴史体感型の常設展示施設です。場所はJR前橋駅北口ロータリー直結の複合施設「アクエル前橋」2階。市民、特に次代を担う子どもたちに郷土の誇りを持ってもらうことを目的に、入場無料で公開しています。施設のテーマは、前橋が直面した「四つの危機」【1. 利根川の浸食による前橋城の崩落／2. 廃藩置県による前橋藩の消滅／3. 世界恐慌による製糸業の停止／4. 空襲による市街地の8割焼失】これらの困難を、市民の力＝民力によって乗り越え、「華都（かと）前橋」という都市像を築いてきた歴史を紹介します。※「華都」は、徳川家康が“関東の華”と詠んだ前橋城と「県都」をかけた造語です。入口に広がるのは、直径5メートルの空撮地図を描いた「ガイダンスゾーン」。スポットにスマホをかざすと、各地で何が起こったかを解説するAR型の案内が表示されます。その先にあるのが、メイン展示である「テーマシアター」。400年の歴史を12分間の映像で再構成し、来館者を没入体験へと誘います。語り部は、前橋出身の声優・田中敦子さん。前橋に棲む猫の視点で、前橋の民の物語を語ります。「前橋の役に立ちたい」と無償でナレーションを提供いただきましたが、2023年に逝去されました。その声は、今もこの地で生き続けています。そのほかにも【「華都と利根川」「県の都」「生糸の都」などのテーマ展示／歴史学者・今井清一氏を紹介する展示と「今井清一文庫」／前橋出身の元首相／鈴木貫太郎を顕彰する会の事務局機能】も館内に併設されています。



【テーマ】

【組織】

教育による持続可能な地方創生のモデル 学校法人共愛学園

【コンセプト】

教育こそが地方創生のかなめ

いま、質の高い教育を求めて地方に移住する「教育移住」という新しい流れが生まれつつあります。とくに先進的な教育環境を求める家庭にとって、地方での子育てや暮らしは大きな魅力となっています。一方で、地方に拠点を置く先端企業の社員が、子どもの就学期を迎えるタイミングで東京などの都市部に戻ってしまうという課題も聞かれます。人材の定着という観点からも、地域における教育の充実は避けて通れない重要なテーマです。こうした中、前橋市では市街地の中心、いわゆる“まちなか”に新たな義務教育学校を設置することで、先進的な教育改革を実現しようとしています。小中一貫の柔軟な体制を採ることで、子どもたち一人ひとりに最適な学びのかたちを提供し、学年という枠にとられない個別最適な教育を展開します。この“まちなか”という希少な環境を活かしながら、地域全体をフィールドとした探究型学習も行い、イシューベース型の実践を通じて、子どもたちの主体性や創造性を育みます。さらに、こうした教育の先に目指すのは、変化の時代において他者と協働しながらより良い社会を築いていく、いわばWell-beingな社会の担い手となる人材の育成です。地域とともに学び、成長するこの学校は、教育による地方創生のかなめとして、まちに人を呼び込み、定住を促す拠点となることを目指しています。

【具体例】



①探究型学習

まちなかを活かす、イシューベースの探究型学習を展開



②個別最適な学び

義務教育学校を活かす、学年によらない個別最適な学びを展開



③子どもが主役の学校

日々の生活やルールを自ら考え実行。学年混在のユニットで、主体性と共同性を育む。

【テーマ】

JINSが前橋に描く未来： サテライトオフィス開設と将来的な本社機能の一部移転へ

【コンセプト】

「地方から、新しい働き方と価値をつくる」

地方都市・前橋を拠点に、JINSが次世代の働き方と地方創生のロールモデルに挑戦します

JINSはこのたび、創業地である群馬県前橋市にサテライトオフィスを開設し、将来的には本社機能の一部を段階的に移転する構想を進めています。その背景にあるのは、コロナ禍を経て加速した働き方の多様化です。リモートワークの普及により、「どこで働くか」は企業活動において大きな選択肢となりました。JINSでは以前から地方拠点での分散型ワークスタイルを模索してきましたが、これを本格的に実装する第一歩として、サテライトオフィスの開設に至りました。また、創業地・前橋との関係性を再構築するという意味でも、本計画は象徴的な意味を持ちます。JINSが育った土地にあらためて根を張ることで、地域と企業がともに未来を描き直す土壌をつくっていきます。サテライトオフィスでは、デジタル業務やバックオフィス、地域連携事業などを中心に業務を展開し、前橋ならではのライフスタイルや感性を企業活動に取り込んでいきます。長期的には、再開発地区に民間投資をして本社機能の一部を前橋へと移し、社員のUターンやIターンを促す人材戦略の一環として位置付けています。この構想がもたらす意義は3つあります。1つ目は、地方創生との連動です。本社機能を部分的にでも地方に移すことで、地域に高度人材が関わる機会が増え、まちに新たな経済や文化の流れを生み出します。2つ目は、「働く場所」から「働きたい街」への転換です。JINSが地方で働くことの魅力を自ら示すことで、前橋はただの勤務地ではなく、「暮らしたい」「根を下ろしたい」と思える選択肢になっていきます。そして3つ目は、CSV経営の深化です。JINSが目指す「Creating Shared Value（共通価値の創造）」という考えのもと、地域と共に課題を解決し、社会と企業の双方にとって持続可能な価値を創出するモデルを、前橋から発信していきたいと思っています。JINSは、働き方の未来と地域の未来、その両方を見据えて活動していきたいと思っています。

【組織】

株式会社ジンスホールディングス



【テーマ】

【組織】

前橋クリエイティブシティ構想 国際コンペ： 群馬県、前橋市、国土交通省 群馬県前橋市から描く未来の都市空間

【コンセプト】

歩いて楽しい都市へ―「ウォーカブル・まちなか」実現のための国際提案

群馬県が主催する「前橋クリエイティブシティ構想国際コンペ」は、最優秀作品の賞金額が日本史上最高の2,500万円で、前橋市中心部のJR前橋駅から群馬県庁までの約1.5kmの都市軸を舞台に、次世代の都市空間のあり方、公共交通のあり方を国際的に募るプロジェクトです。人通りが疎らで活気を失いつつあるこの地域を、公共交通と歩行者中心の「ウォーカブル」な空間に再編し、多様な人々が集い、偶発的な出会いや創造性が生まれる場所へと転換することが目的です。文化・経済・職住が混ざり合い、誰もが主役になれる開かれた都市づくりが構想の柱となっています。開催概要には、**現在進行中の民間主導による中心市街地活性化の取り組みを活かし、それを行政の力強い後押しによってさらに強化することを目的とあります。本デザインコンペでは、未来を指向する都市空間デザインの提案を求めています。**2025年3月には、国内外から集まった応募作品の中から、最優秀案として『稜線がつなぐまちづくり_前橋リッジライン』が選定されました。赤城山の稜線になぞらえて、前橋の自然や文化、暮らしの要素を緩やかにつなぐデザインが高く評価されました。この構想は、単なるインフラ整備にとどまらず、「都市の未来をどう描くか」という問いへの挑戦でもあります。今後は提案チームと群馬県が協働しながら、基本設計と地域調整を進めていく予定です。群馬県を、そして地方都市前橋を、再び魅力的に。群馬発の未来志向の都市モデルが、今ここから動き出しています。



